

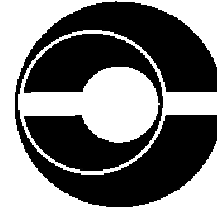
カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 31

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.org>

December 5, 2005



----- 目次 -----

◆巻頭言	
「ポッドキャスト」の勧め.....	楊曉捷 1
◆ニュース	
田中登志枝先生の「旭日単光章」叙勲に よせて	中尾良子 1
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	清水道子・鈴木美知子 3
ニュースレター発行についてのお知らせ	9
会計報告	渡並美和 10
CAJLE 年史・2004-2005... 清水道子・鈴木美知子	12
◆年次大会	
2005 年度年次大会(CAJLE2005)を 振り返って	野呂博子 13
CAJLE 2005 アンケート集計結果	14
ビクトリア雑感	竹井明美 15
CAJLE 大会の魅力と今後への思い... 原田登美	16
◆特別寄稿	
カナダの日本語教育の発展のために 国際交流基金がなすべきこと	齋木宣隆 17
スペイン語学習体験記	ラム智子 18
◆連載	
短歌に詠まれた日本語教育の現場.....	鶴沢梢 21
日本事情・読書	王伸子 23
BULLETIN BOARD	王伸子 26
編集部便り	27

巻頭言

「ポッドキャスト」の勧め

楊 曉捷

個人的な体験をまず一つ披露しよう。思えば十数年前、「インターネット」という表現がまだ言葉の市民権を得ていなかったころ、パソコンに辞書一冊分ぐらいのサイズの外付けモデムを取り付け、日本語が使えるように何重もの苦勞をしてシステムをいじり、ようやくモニターに朝日新聞の記事を出現させた。そして週に数十と現れてくる新しいサイトの記事を丁寧に追いかけて、その結果を学会で発表したりまでしていたものだった。いうまでもなく、そのようなインターネットとの接し方は、いつの間にか不可能となってしまった。新しいタイプのメディアの成長と共に情報を吸収していたその頃の満足感には、恐らく二度と出会うことはなからうと、密かに誇らしく思っていた。

(3 頁に続く)

ニュース

田中登志枝先生の「旭日単光章」 叙勲によせて

中尾良子

日本では毎年秋になると勲章の受勲者の名前が発表される。ウェブサイトでも新聞の叙勲の記事を読んでもあまり関係がないからか、さして気にとめることもなかった。ところが、今年、長年 CAJLE の

会員で、現在は名誉会員でいらっしゃる、トロント日本語学校校長の田中登志枝先生が「旭日単光章（きょくじつたんこうしょう）」を受けられたという嬉しいニュースがトロント日本語学校に届いた。この「旭日単光章」というのは、文化の発展に関し特に著名な功績を挙げた方に贈られる勲章である。因みにカナダからは田中先生の他にバンクーバーの門田ゴードン氏が別のカテゴリーで受勲された。

田中先生と言ってもトロント在住以外の方は、殆どご存知ないかもしれないが、長年、日本語教育に携わってこられ、CAJLE 発足時にも創立者の一人として力になってくださった方でもある。田中先生を語る時、トロント日本語学校の歴史を語らずには済まないが、以前本紙の学校紹介で紹介済みなので詳しいことは割愛させて戴く。トロント日本語学校は戦後日系人移動によってトロント近郊に定住した人達により、1949年に創立され日系人一、二世の子供の語学機関として発足した。昨年は創立55周年と田中先生が校長に就任されてから25年になり、二つのお祝いをしたばかりである。

田中先生ご自身もBC州生まれの二世であるが、成績優秀であった先生は戦争勃発の前年、高校卒業と同時に当時日本語学校の校長であった佐藤伝先生により日本語教師養成のために2年間日本に留学生として送られた。先生は大阪女子師範学校で教師の資格をとられたが、41年に勃発した戦争のため帰国できず、大阪の追手門学院で10年間教鞭をとられ、その間、ご結婚もされて57年にご家族と共にカナダに帰ってこられた。2人のお嬢様も日本語学校で学ばれ、先生も66年から日本語を教え始められ現在に至っており、この40年間日本語学校と共に歩んでこられた。先生が校長となられた70年後半頃から、新移住者・海外企業の子供たちのためのいくつかの語学校が発足し、日本語学校も大きな転換期を迎えた。このような時代の変遷と共に80年代半ばから生徒数が激減し、危機に直面した時期もあったが、成人クラス設立によってそれを乗

り越えることができた。一教室から初まったクラスが現在のように初級から上級まで8レベル（11教室）を備え、現在280（成人223、子供7レベル57名）の生徒数を有する学校に発展したのは、校長先生を初め運営機関の並ならぬ努力と先見の目があったからであろう。常に学校の要として「全身全霊をつくして」と言っても過言ではない献身と情熱には頭が下がるばかりである。私が日本語学校で教え初めたのは1970年であったから、もう先生とは長いお付き合いになるが、先生のバイタリティーには脱帽せずにはおれない。そのエネルギーの素は先生の健康と日系一、二世の方々の忍耐強さ、剛健さと幸せな家庭からくるのではないかと思う。「ファミリードクターはいませんよ」とつい最近まで言われていたように、2、3年前にひどい風邪をひかれた以外は寝込まれたという話を聞いたことがない。雨の日も雪の日も天候に左右されることなく遠いBramptonから学校にだけではなく、他の用事でも頻繁にトロントまで運転していらっしゃるその行動力には兜を脱ぐよりほかない。

また、先生は大変家庭的に恵まれた方であるということだ。先生ご夫妻は「おしどり夫婦」として知らない者はないほど、いつ、どこでもお二人はご一緒なのである。ご主人も永年学校で献身的にボランティアとして休み時間のコーヒーを作ったり、いろいろな雑用をしてくださり、学校ではなくてはならない方でもある。また、ご家庭ではお嬢様ご夫妻と同居されお孫さんに囲まれ、とても幸せそうである。今年は10月にご夫妻で久しぶりの日本訪問をされ、帰国されたら叙勲のニュースが待っていて、先生ご夫妻にとってこの上なく喜ばしい年であったと思う。叙勲式は1月13日に領事館公邸で行われる。私たち日本語学校も大きなお祝いのパーティを企画している。

田中先生は、現在滋賀県人会の会長も勤められ、お忙しそうである。どうぞ、これからも益々お元気でお幸せでありますように、お祈り致します。

(「ポッドキャスト」から続く)

しかしながら、最近になってまた新たなメディアに夢中になってきた。さきの体験とダブらせて考えると、どうやら似たようなことに再び直面しようとしているようだ。今度は文字をモニターで読むのではなく、インターネットから伝わってくる音声を手で聞くというものである。それは、やたらにカタカナを並べた「ポッドキャスト」といって、一世風靡しているアイ・ポッドからくる造語である。

ポッドキャストの仕組みは、いたって簡単だ。定期的に提供してくる音声の情報を特定のソフトを使って「予約」し、新しい情報がインターネットに載せられたら自動的に(あるいは手動で)個人のパソコンに保存する。その後、パソコンから音声を再生するデバイスに転送して、音楽を楽しむ感覚で聞くのだ。すなわち、音声デバイスが電波を受信するわけではないので、ラジオのようなリアルタイムの連動はなく、あくまで受信者が内容を選んだうえでの受信なのである。ちなみに、音声の情報は、ストリーミングなどのいわば発展途上の技術から一步下がった、MP3 といったすでに確立されたものを用いるものだと付け加えたい。

英語の世界では、ポッドキャストという言葉はようやく満一歳になる。それに比べると、日本での展開はまだまだこれから、という感じだ。内容のあるサイトは週にいくつか現れてきて、まだどれもさほど情報の量は多くなく、一通り聞いてみる事が可能だ。膨大な個人運営の、日記風のもの以外、メジャーなところの参入が目立つ。例えば TBS ラ

ジオ、ABC ラジオ、文化放送といった放送の大手が提供するニュース、文化記事、流行作品のラジオドラマなどがあって、実に聞き応えがある。

わたしが音声というメディアに惹き付けられる理由はいくつもある。日本語教育という仕事からして、音声のリソースにはつねに特別な愛着をもつ。日本から遠く離れて生活していれば、日々に移り変わる日本の事情や、あれこれ取り上げられる話題にはよけいに興味を感じる。それに、自分の研究分野である古典の世界への思いがある。古典と現代の、記録のメディアにおける一番の大きな違いは、音声を記録する手段の有無にある。だから古典を今日の人々に楽しんでもらうためには、音声による古典の再現がつねに期待される課題であり、音声メディアの形成と発展は、わたしにはいつも大きな刺激となる。

ごく最近行われたある調査によれば、日本での「ポッドキャスト」への認知度は4割を超えていると言われる。どのようなデータを踏まえてかは不明だが、実感としてはそこまでにはとても至らない気がする。いずれにしても、読書や仕事の合間にさまざまな内容の音声を聞いてみるのは、理屈抜きに楽しい。興味のある方はぜひ試してみるようお勧めする。日本語の内容なら「Podcast Now!」(<http://podcastnow.net/blog/>)、英語の内容なら「Yahoo Podcasts」(<http://podcasts.yahoo.com/>)から始めたら良からう。音声プレーヤーさえ一個あればこと足りる。あとは目をモニターから逸らして、悠然と構えて、楽しもう。

活動報告とこれからの活動案内

2005 年度年次大会報告

2005 年度年次大会は、バンクーバーにカナダで初めて日系子女のための日本語学校が設立され、来年は100年を迎えるという、継承語日本語教育発祥

の地 BC 州に会場を移して行われた。

国際交流基金、国立国語研究所、ビクトリア大学人文学部をはじめ、様々な機関から多大な援助をいただき、かつBC州日本語教育振興会の協賛を得て

ビクトリア大学にて8月19日から21日まで3日間
にわたり開催され、4日目の22日は、自由参加に
よる日帰りバスツアーも実施された。

第1日目の開会式には、在バンクーバー日本国総
領事館から多賀敏行総領事、八木俊樹領事をお迎え
することができ、総領事には、「暗号電報の悲劇 -
日米開戦前夜」と題する配布資料を参照しつつ、日
本とカナダはじめ北米との現在に至るまでの歴史
的關係の中での誤解や誤訳の生む問題などについ
て、さまざまな観点からの有益なお話を伺った。次
いでビクトリア大学の Dr. James Anglin 氏から、大
会に寄せる期待の言葉をいただいた。第2日目には、
バンクーバー日本語学校の新納基久先生により、
「バンクーバー日本語教育史散歩」と題し、興味深
い基調講演をいただいた。

今年度は、記念すべき年来年に控え、カナダに
おける日本語教育を「岐路に立つ日本語教育」とい
うテーマを中心に据えて、基調講演、パネルセッシ
ョン、研究論文発表、日本語教師のための研修会お
よびワークショップなど、カナダにおける日本語教
育の歴史を振り返り、また未来を探る企画がなされ
た。

英語による研究論文発表、また研修会では、非母
語話者の日本語教師が参加でき、同時に母語話者の
日本語教師たちとともに研修を受けることにより、
お互いの交流の場となるよう配慮された。

懇親会、日本語教材展示販売も例年通り実施され
た。

初日(19日)夜にキャンパス内の会場で開催さ
れた懇親会は満員の盛況で、ビュッフェ形式でとり
どりの見事な山海の幸に舌鼓を打ちながら、来賓の
方々の挨拶を伺い、頃合いよく今回も川口義一先生
のお楽しみがあり、めずらしい楽器が演奏された。
一般名称では、口琴(コウキン)と呼ばれているも
のだそうで、先生が演奏されたのはシベリアのサハ
族の使っている鉄製のものと、ベトナムの山岳少数
民族が使っている銅製のものの2種類で、華奢で小さ

な楽器をたなごころに包むようにしてテーブル毎
に披露してくださった。

今大会では、BC州日本語教育振興会の多くの皆
さんとも交流でき、また太平洋側とあって日本から
の参加者も多く、参加者層の若返りも感じられる画
期的な大会だった。参加者総数94名、国別にして
カナダ60名、日本30名、アメリカ2名、韓国1
名、香港1名、3日間の延べ出席数235名と、盛大
かつ成功裡に終わることができた。大会プログラム
及び定例総会の詳細は次の通りである。

研究論文発表

4会場同時進行にて2日にわたり研究発表27、パ
ネルディスカッション2、ワークショップ1と盛り
だくさんの内容であった。

8月19日

パネル1-1 (Clearihue A127)

- 村上仁 (香港城市大学): 「一緒に飲茶に行きませ
んか」 --日本人を取り込んだ授業外活動
- 大江都 (マウント・アリソン大学): クリエイティ
ブ・ライティングの指導II--初級レベルの学生が小
エッセイを書くとき--

パネル1-2 (Clearihue A215)

- 原田登美 (甲南大学 国際言語文化センター): 「~
てもらおう」と「~てくれる」の表現の差異--恩恵・利
益を表す<授受表現>はいかにして<敬意表現>
に関わっているか--
- 太田陽子 (早稲田大学大学院博士後期課程): 文型
指導における「文脈」の必要性--「空がくもってい
るから、雨が降るはずです」はなぜおかしいか--
- 平川八尋 (東京工業大学留学生センター): 被害使
役文のアスペクト分析

Makiko Hirakawa (東京国際大学) - L2 Knowledge of two types of intransitive verbs in Japanese

パネル1-3 (Clearihue A309)

- パネルディスカッション-日本語教育における演劇
的アプローチ: 話し言葉の獲得
- 川口義一 (早稲田大学)、清末逸子 (外語ビジネス

専門学校)、Cody Poulton (ビクトリア大学)

パネル1-4 (Cornett A229)

- Kaori Kabata (University of Alberta) : Usage Patterns of Japanese Particles in CALLHOME Corpus
- Yukiko Wada・Shoichi Yokoyama (国立国語研究所) : Standardization of Kanji and e-Gov kanji database
- Yuko Igarashi・Joseph F. Kess (University of Victoria) : Why Are Katakana Words Difficult for Learners of Japanese? The Investigation of its Reasons from the Linguistic Perspective
- Steve Calder (University of Victoria) : Learning idioms from the learners' perspective

パネル2-1 (Clearihue A127)

- サマレル史子 (カルガリー大学): イメージョンで学ぶことばと文化
- 鈴木洋子 (埼玉大学): コミュニケーション重視の日本語教育の構築に向けて--応答期待疑問表現を例として--
- 原澤伊都夫 (静岡大学留学生センター): 日本語教師のための文法教育--参加体験型学習アプローチの実践報告--

パネル2-2 (Clearihue A215)

スピーチ指導ワークショップ

- 矢澤理子 (国際交流基金関西国際センター): スピーチコース設定の意義--
- 和泉元千春 (国際交流基金関西国際センター): 初級成人学習者を対象とした口頭表現指導用教材の開発―「初級からの日本語スピーチ」使用の実践から--

パネル2-3 (Clearihue A309)

- 楊曉捷 (カルガリー大学): 日本語教科書内容データベースの構築をめぐって
- 王伸子 (専修大学): デジタル機器を使用した学習者個々の副教材

パネル2-4 (Cornett A229)

- 松嶋緑 (大東文化大学 別科研修課程): 初級口頭表現指導における聴解優先教授法の有効性--実践

報告から--

- 谷口龍子 (国際基督教大学博士後期課程): 依頼表現のポライトネスに関する日中対照研究
- 崔廷珉(チェジョンミン) (早稲田大学大学院日本語教育研究科博士課程): 漢字能力と学習スタイルについて--韓国人日本語学習者の場合--

8月20日

パネル3-1 (Clearihue A127)

- 亀川順代 (同志社大学大学院文学研究科博士課程後期): 日本語教師のビリーフとその形成に関する事例的研究--ナラティブ・アプローチを用いて--
- 畔上ラム智子 (レジャイナ大学): 日本語学習者の学習動機についての一考察
- 奥村訓代 (高知大学): 日本語教員養成課程の周辺
- 富阪容子・森川結花・永田雅子(甲南大学国際言語文化センター) : 留学生自身が語る日本語上達の秘訣

パネル3-2 (Clearihue A201)

- 浅野真紀子 (サンフランシスコ州立大学): 未知の音・既知の音--英語話者が会える日本語の音声と音韻の問題点--
- 木下直子 (明海大学総合教育センター)・戸田貴子 (早稲田大学大学院)・Chris Sheppard (大東文化大学): 習得度の高いgood-learner による発音の特徴
- 上野善道 (東京大学): アルファベット頭文字語のアクセント

パネル3-3 (Clearihue A206)

パネルディスカッション-継承語としての日本語: 過去、現在、未来

- 桶谷仁美 (イースタンミシガン大学)、村上陽子 (グラッドストーン学園)、森河内靖子 (キラニー日本語クラス)、ミッジ鮎川 (日系史研究家)

パネル3-4 (Cornett A229)

- 西島美智子 (ニューブランズウィック大学): 異文化/異言語を考える--日本語クラスでの実践例--
- 公文素子 (韓瑞大学校・韓国): 海外における日本語教授の諸問題--韓国人日本語学習者の日本語表

現について--

- ・井上道雄 (神戸山手大学) : カタカナ語 (外来語) 基本語彙と重要語の選定

教師研修会

全5セッションは、以下の通りである。

教師研修会 (1) 19日 (金) 午後

柳澤好昭 (国立国語研究所) : 「コンピュータ利用で日本語教育を再考」

教師研修会 (2) 20日 (土) 午後

川口義一 (早稲田大学) : 「初級日本語教育における表現指導の課題 - 『会話』指導と『非会話』指導」

教師研修会 (3) 20日 (土) 午後

王伸子 (専修大学) : 「日本語学習における日本事情講座の役割」

教師研修会 (4) 21日 (日) 午前

原田哲夫 (早稲田大学) : 「早期日本語教育における発音習得とその発音教育への示唆」

教師研修会 (5) 21日 (日) 午後

宇田川洋子 (国際交流基金) : 「Activities and Strategies, Developing a Sequential Lesson Plan」

日帰りバスツアー

22日、ひんやりと澄んだ空気、りすならぬ野兔の三々五々芝生に草をはむ快晴の朝、キャンパスを後にツアー参加者26名一行は一路ビクトリア ブッチャートガーデンへと向かい、庭園散策、昼食を済ませ、次いでワイナリー見学、工場のガイドに導かれ、ぶどう畑でぶどうの採れるまでの説明を受けたのち工場見学、試飲を楽しみ、帰路は小高い丘の上の見晴らし台から美しい眺めを楽しみ、ダウンタウンで解散した。

ボランティアお二人の綿密に準備をされたガイドに、車中もクイズを交えながら、終始和やかな時間が流れ、充実した一日だった。

2005年度定例総会

王伸子会長代行挨拶 :

2005年のCAJLE年次大会に、ようこそおいでくださいました。

今年は、BC州のビクトリア大学において大会を行うという、画期的な大会となりました。長いあいだ念願であったBC州のみなさんとのつながりを持つということができ、また、BC州における日本語教育100年という歴史的な年にこの地に集まることができ、これからのCAJLEの発展にも大きな意味を持つ大会になると信じております。

また、バンクーバーの、在バンクーバー日本総領事館から多賀敏行総領事、八木俊樹領事をお迎えすることができました。多賀総領事には、日本とカナダの歴史的関係、文献からの解釈、および、小泉首相のホームページからの引用など、さまざまな観点から有益なお話を、というより講義をしていただき、大会に先立ってたいへん価値ある知識を授けていただいたと感謝しております。

さらに、ビクトリア大学のDr. James Anglinにもご挨拶いただきました。今回、とくにビクトリア大学からは多大な経済的援助もいただきました。国際交流基金からの助成金と合わせて、大会運営にあたり大きな助けとなりました。この場をお借りし、御礼申し上げます。

今回も、カナダ、日本、アメリカ、韓国、中国香港の5カ国から発表者があり、また、いくつかの研修会も予定されております。年に一回の貴重な勉強の場として、また交わりの場として生かしてください。

最後になりましたが、準備に当たって多くの時間と労力をさいてご尽力くださった大会委員長である、ビクトリア大学の野呂博子先生、およびビクトリア大学の諸先生方、BC州のみなさまに心より感謝申し上げます。

1 2004年度活動報告及び2005年度活動予定

(1) 2004年度年次大会及び定例総会 (清水)

2004年度当会年次大会は、会場をトロントに戻し、国際交流基金及び、同基金トロント日本文化センターの多大な援助協力をいただき、国際交流基金トロント日本文化センターを会場に8月19日(木)

から21日(土)まで、3日間にわたり開催された。
 なお、4日目、22日(日)は、自由参加による日帰りナイアガラツアーが実施された。

今年度は、「日本語教育—その指導法の充実」をテーマに、研究論文発表、カナダ、アメリカ、日本からの講師による研修会で、トルコ、スペイン、中国、韓国からの参加者も迎え、第1日、2日目の午前の2日間、同時進行で、24名の発表が行われ、教育現場からの実践報告が多数あり、大会テーマを反映して大変に有意義な発表だった。大会参加者102名、連日70名を超えて盛会だった。(詳細はニュースレター29号参照)

2004年度定例総会は、8月20日(金)トロント国際交流基金及び同基金トロント文化センターにて開催された。西島美智子会長の挨拶、桶谷仁美議長進行により旧理事15名が紹介され、新理事は同じく15名で出席者一同の拍手を得て承認、可決された。(詳細は、ニュースレター29号参照)

(2)2004年度部会活動及び2005年度活動予定

(イ) 2004年度オンタリオ部会活動報告とこれからの活動予定(鈴木)

2004年度オンタリオ部会活動報告

トロントの部会活動は、オンタリオ部会と名称を改めたのを機に、原点に戻って活動方針を再検討し、2004-5年度の活動方針を、1. 継承日本語教育の啓蒙、2. 日本語教師研修、3. 調査プロジェクトと大きく3項目に定め、年明けより具体的に活動を開始した。

a. 継承日本語教育の啓蒙

地元の組織と密接に提携しつつ草の根啓蒙活動を展開していく事を打ち出し、新移住者協会日本語プロジェクトはもとより、350家族余のメンバーを擁する小さな子どもを持つ親たちの会であるベビートークスフォーラムとの提携を実現させ、2回連続「家庭におけるバイリンガル教育」講演会及び学校説明会と3つの行事を実施した。

b. 日本語教師研修

①トロント移住者協会との共催による文法講座その4、「笑わせて教える日本語」「えっと驚く母音の謎」、②CAJLEオンタリオ部会主催 現場で直ぐに役立つ日本語文法講座、「日本語教師のための考える生きた初級文法とその教え方」と、焦点を知識面中心においたものと実践面中心においたものと2回の文法講座を実施した。

c. 調査プロジェクト

日本語学校の従来の継承語学習形態を保持しつつ高校クレジットが取得できるクレジットプログラム Prior Learning Assessment and Recognition (PLAR) がオンタリオ州において1995年度よりすでに実施されているとの情報を得たので、日本語教育にも導入できるか、どう導入すれば良いかなど調査検討に着手した。(詳細はNL30号3-5ページ参照)

d. 去る7月22日(金)に、CAJLE、新移住者協会日本語プロジェクト、ベビートークスフォーラム、国際交流基金トロント日本文化センターと、4組織がそれぞれの活動予定を持ちより、05-06年度の活動予定を検討し、承日本語教育の啓蒙活動3回、日本語教師研修2回、調査プロジェクト1回を以下のごとく企画した。

2005年11月6日(日)

午前: PLAR 説明会<活動方針 3. 調査プロジェクト>

午後: 日本語教授法講座 <活動方針 2. 日本語教師研修>

12月18日(日)午前 日本語学校説明会および、ブースを設けての面談による個人的な説明 <活動方針 1 継承日本語教育の啓蒙>

(ロ) アトランティック部会 2004年度活動報告とこれからの活動予定(大江)

アトランティック部会はこの3月に発足し、私が部会代表を受けました。4州の背景及び部会の現状についてはニュースレター30号18ページに掲載しましたのでご参照下さい。現在、部会のメンバーはニューブランズウィック大学の西島美智子さん、マ

ウントアリソン大学の大江都、同大学で教えられた名誉部会員の王伸子さんの3名です。4州7大学にて日本語の講座を開いております。ニューファンドランドのメモリアル大学、プリンス・エドワード島大学、ノバスコシア、ハリファックスのセント・メアリーズ大学、ニューブランズウィックのニューブランズウィック大学、セント・トーマス大学及びマウント・アリソン大学、そして、数年前にカレッジが昇格したアトランティック・バプテスト大学です。広い4州で日本語教育に携わる先生方を把握するために各大学の名簿を、今秋新学期に入ってから作りコンタクトしていきたいと考えています。それを元にもまずこの地域でのネットワークを広げ情報を交換して勉強会など進めていきたいと思えます。そして尚且つ、CAJLEの会員になっていただくよう薦めるつもりです。1998年より4州合同の弁論大会が毎年開かれ、これが唯一の交流の場で、引き続き日本語教育情報交換等の大切な場として活用していきたいと思っています。

(ハ) 企画研究部 (野呂)

担当者の金谷、谷原両氏が欠席され、2005年度の研究発表がこの大会に限られていることで、今大会での研究発表の数と、どの国から参加されたかについて報告します。個人発表ですが、2人、3人での共同発表がありますが、合計で29点ありました。この中で、国際交流基金、関西センターの和泉元千春さん、矢澤理子さんの場合は個人発表の枠で行う予定でしたが、幸い教室が取れたこともあり、特別扱いでワークショップとして1件、パネルディスカッションが2件、全体で研究発表者は44名で、日本、カナダ、アメリカ、香港、韓国から参加されました。

(ニ) ジャーナルCAJLE2004年度活動報告とこれからの活動予定 (桶谷)

皆さんにすでに配られました7号が今年発行されました。そして今年も査読に携わって下さいました、野呂先生、今大会に参加された川口先生、上野先生そして、牧野先生、曾我先生、金谷先生の6名

の先生方がご協力下さいました。ありがとうございました。今回はトロント大学の方で、坂本光代さんが、英語の訳をして下さいました。投稿規程、役員紹介もすべて英語訳ができました。私が日本訪問したこともあって、谷原さんが殆どフル回転で仕事をして下さいました。年々とても良いものになりつつあります。来年度のジャーナルですが1ヶ月延びて1月15日が締め切りとなりましたので、今回発表された方、加筆、修正していただいて結構ですので、是非ご応募下さい。今年は8本の応募の中から7本が掲載されましたが、来年度はたくさんの方々からの応募をお待ちしております。

(ホ) ニュースレター、ホームページ2004年度活動報告とこれからの活動予定 (楊)

今年度も古き、長き、すばらしき伝統に従って仕上がった。より良いものにしたいので、自薦他薦、特に他薦での投稿をお願いしたい。

ホームページでは、昨年の大会で決めたことでそれが無理と分かり、カルガリー大学に当たって、サーバーを無料で借りて今の形になった。しかし、昨年決められたサイト名が長い目で見ると大変に役立っている。1つは読まれるホームページ、読まれていなくても、調べられるホームページになれば充分と思う。サイトを通して、これから行われるイベントの情報を調べる使い方さえわかれば充分だと思う。名簿、地域活動案内などニュースレターとは別に資料などを、サイトを通して誰でも調べられるという意味でも大いに役立てて欲しい。

(ヘ) OBC貸し出し状況報告 (鈴木)

2002年4月にはOBCが売り切れたのでその年から貸し出しを始めました。昨年度まではボツボツ貸し出し、昨年11月に、ホームページを読んで是非借りたいという日本からの希望者が出て、期限内に返却されました。この3年4ヶ月で10名が希望され返却されています。多分ご活用下さったと信じております。

2 2004年度会計報告及び 2005-2006年度予算案 (中尾・渡並)

・2004年度会計報告が収支項目に沿って報告された。
 ・2004-2005年度予算案が提出され、出席者からの
 質疑応答後、報告の承認と予算案が拍手で可決され
 た。

3 2005年度理事会承認事項報告及び承認（議長）

昨年11月23日付けでプライス・ウオーターハウ
 スのフロレンス・リアング氏に振興会公認会計士
 としてお願いしてきたが、今年よりMr. Tony T.
 Toishiをお願いすることになった。（報告）

ジャーナルCAJLEの投稿締切日は来年度より1
 月15日に決定した。（報告）

4 理事選出

なし。2004年度～2005年度現理事役員の紹介。

会長代理及びジャーナル 王伸子、副会長及び
 ジャーナル 桶谷仁美、書記及びオンタリオ部会
 清水道子・鈴木美知子、会計及びオンタリオ部会
 中尾良子・渡並美和、ジャーナル及び発表企画 谷
 原公男、ニュースレター及びホームページ 楊暁捷、
 ニュースレター、ホームページ及びアトランティック
 部会 西島美智子、ニュースレター及びオンタリ
 オ部会 杉本陽子、ニュースレター サマレル清水
 史子、発表企画 金谷武洋、2005年度大会企画 野
 呂博子、アトランティック部会 大江都

年次大会（総会）後の移動報告：

2005年度役員一部移動：第1回理事会(aug.21.2005)

王伸子氏は、会長代行から会長に、野呂博子氏は
 副会長に、大江都氏は、ニュースレター担当部に就
 任。参加理事の承認を得て可決した。

2006年度年次大会委員長：緊急オンライン理事会
 (nov.18.2005)

2006年度年次大会委員長に谷原公男氏、副委員長
 に杉本陽子氏が承認を得て可決した。

これからの活動案内

1. 今後のオンタリオ部会活動：

2006年

2月（日時未定）継承日本語教育の啓蒙＜活
 動方針 1＞

3月（日時未定）日本語教師研修のための文
 法講演会＜活動方針 2. 日本語教師研修＞

4月（日時未定）バイリンガル教育パネルデ
 ィスカッション形式によるシンポジウム＜活動
 方針 1 継承日本語教育の啓蒙＞

2. 2006年度大会は、8月25日から28日まで、ト
 ロント国際交流基金、同基金日本文化センターで開
 催の予定です。

文責：（書記）清水道子・鈴木美知子

ニュースレター発行についてのお知らせ

王伸子

定期的にお送りしているニュースレターについて、
 会員の皆様からのご意見をいただき、従来のハードコ
 ピーを郵送するという方法から、ファイルの形にして
 Eメールで送信するという方法に切り替えることを
 検討してまいりましたが、折からの財政状況にも鑑み、
 理事会におきまして、来る2006年6月発行のニュー
 スレター第32号より、皆様のお手元にEメールでお
 届けすることを決議いたしました。

したがって、ニュースレターの郵送は今号までとさ
 せていただきたいと思います。引き続きハードコピー
 の郵送を希望される場合は、手数料として5カナダド
 ルをご納入ください。日本語のメールが読めないソフ
 トをお使いの方、コンピュータをお持ちでない方はご
 利用ください。

今後はメールでの配信により、カナダ国内でも遠方
 にお住まいの会員の方や、海外在住会員の方にもいち
 早く読んでいただくことが可能となります。どうぞ、
 以上の旨、ご理解の上ご協力くださいますようお願い
 申し上げます。メールにて受け取ることに同意してく
 ださる方は、とくに何もご連絡くださる必要はありま
 せん。メールアドレス変更等ありましたら、事務局ま
 でご一報ください。よろしく願いいたします。

なお、非会員の方や機関で当ニュースレターを受け
 取っていらっしゃる場合は、これまでどおり郵送にて
 お届けいたしますのでご承知おきください。

《 年 史 》

2004年度 主な活動と内容 (2004年8月-2005年8月)	
2004年 8月19日 -21日	2004年度年次大会 (国際交流基金トロント日本文化センター) 後援トロント国際交流基金 大会実行委員長: 西島美智子 研究論文発表会 (注1): 会場1. 19日 眞崎睦子 (北海道大学) 大江都 (マウント・アリソン大学) 浅野真紀子 (サンフランシスコ州立大学) Kazuko Imaeda (Private Tutor, Waterloo) ライリー洋子 (カルガリー大学) 村上仁 (香港城市大学) 内田クツロフ雪絵 (ヒルフィールド・ストラタランカレッジ) 20日 原田登美 (甲南大学) 奥村訓代 (高知大学) 広瀬研也 (チャナッカレオンセキズマルト大学) 原沢伊都夫 (静岡大学) 楊曉捷 (カルガリー大学) 会場2. 19日 公文素子 (韓瑞大学) 柴田あづさ (佐賀大学/福岡女学院大学) 竹井尚子 (ブリティッシュコロンビア大学) 岩田園美 (ブロック大学) 金山貴美 (ジョージアサザン大学) 三島幸子・藤岡典子 (シンシナティ大学) 20日 天野修治 (バルセロナ日本語センター アマノジユク) 藤村泰司 (国際大学) 永瀬治郎 (専修大学) 山本雅子 (愛知大学) 下条光明 (ニューヨーク州立バッファロー大学) 張勤 (中京大学/カルガリー大学) 現職教師研修会: 19日 フォード丹羽順子 (佐賀大学) 「コミュニケーションのための日本語教育文法と練習のあり方」 20日 江副隆秀 (新宿日本語学校) 「江副式教授法—文法指導の実践・視覚教材の導入」 21日 英語によるワークショップ、宇田川洋子 (国際交流基金派遣アルバータ州教育省) Activities and Strategies for Programs of Japanese Language and Culture 片岡裕子 (カリフォルニア州立大学ロングビーチ校) 「日本語学習における批判的思考の指導」 2004年度定例総会 (同会場) 会員実数 151名 21日 西島美智子会長挨拶、・2003年度部会活動及び2004年度活動予定 ・2003年度会計報告承認及び2003年~2004年度予算案提出と承認。 ・改選なし。現理事紹介—西島美智子・金谷武洋・桶谷仁美・鶴沢 梢・古屋賀子・清水道子・鈴木美知子・中尾良子・渡並美和・王 伸子・杉本陽子・谷原公男・楊 曉捷・サマレル清水史子 19日 教材展示及び販売 にほんごサークル -21日 CAJLE 出版物展示及び即売 (注2) カナダ日本語教育振興会 22日 自由参加による日帰りナイアガラツアー 企画: 杉本陽子 12月1日 ニュースレター 29号発行 編集長: 楊曉捷
2005年 2月13日	文法講座「笑わせて教える日本語」「えっと驚く母音の謎」講師 金谷武洋 (モントリオール大学) NJCA (注3)主催、JICA(注4)後援
2月27日	「家庭におけるバイリンガル教育」講演会第1回:「乳幼児期の家庭におけるバイリンガル教育—実践的見地から—」講師: 鈴木美知子 CAJLE、NJCA、BTF(注5) 共催 会場 JCCC(注6) AJC コート
3月13日	講演会第2回:「バイリンガル教育の大切さ—継承語教育の大切さ」講師: 桶谷仁美 (イーストミシガン大学) NJCA 主催 JICA 後援 会場 JCCC AJC コート
4月10日	文法講座「日本語教師のための考える生きた初級文法とその教え方」講師: 谷原公男 (ニューヨーク州立大学バッファロー校) NJCA 主催、JICA 後援 会場 JCCC AJC コート
4月17日	学校説明会—トロント周辺9校参加。NJCA 主催、CAJLE、BTF 後援、会場 JCCC AJC コート
6月10日	ニュースレター 30号発行 編集長: 楊曉捷
注1: 研究論文発表、第1・2両日、午前2日間にわたり2会場同時進行にて、カナダ、アメリカ、日本、スペイン、中国、韓国より24名の発表。NL29号参照 注2: ジャーナルCAJLE 7号発行 注3: トロント移住者教会日本語プロジェクト 注4: 独立行政法人国際協力機構 注5: ベビートークスフォーラム 注6: トロント日系文化会館	

年次大会

2005 年度年次大会（CAJLE2005）を振り返って

CAJLE2005 大会委員長 野呂 博子

今年の夏、我が CAJLE 年次大会が初めて、カナダ最西端のブリティッシュ・コロンビア州（以下 BC 州）州都、ビクトリアで開催されました。会期中は晴天に恵まれ、ガーデンシティの面目が立ったかと思えます。普段はあまり自然環境や庭の美しさに目を向けることがなかったのですが、参加者の皆様にビクトリアを賞賛され、「結構、いいところに住んでいたんだなあ」と実感した次第です。今回は日本語教師会の草分けである BC 州日本語教育振興会のご協賛を得て、BC 州からの大会参加者、また振興会への入会者が増え、主催者として大変うれしく思っております。2005 年 8 月 19 日（金）から 21 日（日）までの 3 日間、ビクトリア大学を会場に盛り沢山のプログラムをお届けいたしました。そして、8 月 22 日（月）のビクトリア市内観光は和気あいあいとした雰囲気の中で参加者同士の交流がはかれたようです。

バンクーバーにカナダで初めて日系子女のための日本語学校が建設されて、来年は 100 年を迎えます。100 年の間に日本語教育の形態、目的も変化を遂げ、紆余曲折を経ました。最近では学習者の多様化により、日本語教育のあり方が継承語教育か外国語教育かというように簡単に分類ができなくなっているのが現状です。2005 年の大会では「岐路に立つ日本語教育」というテーマを中心に、カナダの日本語教育を歴史的に振り返り、また未来を探りました。このテーマで、バンクーバー日本語学校理事、講師、エッセイスト、ラジオにつぼんのパーソナリティーでいらっしゃる新納基久先生に基調講演をしていただきました。バンクーバーの歴史散歩とも

いうべき内容で、ユーモアたっぷりの軽妙な語り口に聴衆は引き込まれたようです。また、「継承語としての日本語」パネルセッションも、戦前、戦後と日本語教育に関係された方々のお話が大変おもしろかったと、参加者から感想をいただいております。

CAJLE は 1988 年の発足以来、さまざまな活動を行ってきましたが、その中でもこの年次大会は活動の最大の柱となっています。年次大会はカナダ各地、またカナダ国外に広がる会員が集まり、直接的な交流が出来る一年に一度の機会です。さらに、研究論文発表会を通じ、新会員が増え、会が活性化する非常に重要な場となっています。今年は今までの記録を破り、28 の研究論文発表、パネルセッション 2 つ、国際交流基金関西国際センターの方による特別ワークショップなど、数多くの発表がありました。しかし、同時進行のセッションが多くなったことから、聞きたい発表にすべていけないという問題があったことは、理解しております。主催者として反省すべきものがあります。このあたりのことが、大会運営におけるジレンマだと思います。

今回は日本とカナダから 6 名の講師をお迎えし、様々な形で、さまざまな切り口から日本語教育に関わる研修を担当していただきました。簡単に各研修会の様子をご紹介します。

<コンピューター利用で日本語教育を再考> (国立国語研究所日本語教育部第二領域長・柳澤好昭先生)

日本語教育における I T 利用や教師間教育情報科学ネットワーク等、アイデア満載の研修をしていただきました。参加者全員に資料・ソフトウェア集

のお土産まで用意してくださいました。

＜初級日本語教育における表現指導の課題—「会話」指導と「非会話」指導＞（早稲田大学・川口義一先生）

CAJLE ではおなじみの、多彩で多才な川口先生です。教科書に載っているいわゆる「会話」がなぜ自然でないかの分析をうかがった後、小グループで実際に自然な会話を作るアクティビティをしました。また、懇親会ではいつもながら芸達者なところを披露していただきました。

＜日本語学習における日本事情講座の役割＞（専修大学・王伸子先生）

日本語母語話者にとって、常識となっている言語以外のことがらが意外と日本語学習者にとっては大きな障害になっているという事実を、具体例を多く挙げながらお話していただきました。日本国外で日本語を教える人たちには大変参考になったと思います。

＜早期日本語教育における発音習得とその発音教育への示唆＞（早稲田大学・原田哲男先生）

バイリンガルと言っても両言語を母語話者レベルまで発達させるのは大変なことなのだというのを綿密なデータを駆使し、示されました。私は自分

の息子のバイリンガル教育に失敗したという思いをずっと持っていたためか、原田先生のお話を聞いて大いに慰められ、また励まされました。理論的なお話も大変刺激的で面白かったですが、アニメを使って、発音練習、聞く練習という斬新なアイデアに大変感心しました。時間切れで残念でした。

＜Activities and Strategies, Developing a Sequential Lesson Plan＞（国際交流基金派遣・アルバータ教育省・宇田川洋子先生）

一昨年、昨年の大会に引き続き、英語で研修をお願いしました。日本語母語話者と英語母語話者がミックスした聴衆でしたが、日本語のクラスですぐ使えるようなコンピューターを使った教材やゲーム、アクティビティなどを小グループになって、実際に試しました。思いがけず力が入って、勝負にこだわっている人達を目撃しました。

以上、簡単ですが、今年の年次大会を振り返ってみました。いろいろご不便をおかけしたと思いますが、多くの方々に成功であった、楽しかったとお褒めの言葉をいただきましたことは、主催者としてこの上ない御褒美でした。皆様、ありがとうございます。また、来年も CAJLE 年次大会へおいでください。

CAJLE2005 アンケート集計結果（29名回収）

1. CAJLE2005 参加

初めて：11 二回目以上：18

2. 参加者の現居住国

カナダ：17（BC11, ON4, SK1）

日本：11 その他：1

3. 日本語教育との関わり

A:教育機関：

大学、短大：18 高校：4

小中学校：1 民間の外国語学校：1

日系子女を対象とした日本語学校：2

家庭教師：1 その他：4

B:学習対象：

継承語としての日本語：4

外国語としての日本語：20

その他：4

C:年齢レベル

幼児：2 小学校児童：2

中学校生徒：4 高校生：6

大学生：20 社会人：6

4. 大会の時期、期日

都合がいい：25 不都合：3

提案：5月がいい、8月の航空券の安い時期がいい、
2月か3月の航空券の安い時期がいい。

5. 大会の全体評価

いい：13 大変いい：15

コメント：アットホームな雰囲気でもよかった。学ぶ
ことが多かった。同時進行のため聞くことのできな
い研究発表が多くあった。

6. セッションの参加、意見

研究論文発表：22 教師研修会：25

基調講演：20 教材展示・即売：9

英語発表及び英語研修会：9 その他：3

良かった点：クラスで実際に役立つアイデアが多
くあった。アットホームな雰囲気でもよかった。運営
陣の気配りがよく、親切にもらった。

改善してほしい点：同時進行の場合は、会場を同
じ建物内にしてほしい。同時進行でも、会場は2つ
ぐらいにしてほしい。研究発表では、実践報告と本

格的な研究との2通りに分けてほしい。

7. 同時進行について

①しかたがない。②4会場は多すぎる。2-3が適
当。③テーマ別になっていてよかった。

8. 懇親会について

①おいしかった。②知り合いと同席しないように、
くじ引きで席を決めた方がよかった。③参加したい
人が全員参加できるようにしてほしい。

9. 今後取り上げてほしいテーマやトピック

①カタカナ語等に関する研究。②学習者を増やす
ためのニーズの作り方。③問題点について話し合う
場があるといいと思う。④Authentic material の取
り入れ方。⑤実際に教室で使えるゲーム、タスク、
アクティビティ等の紹介。⑥マルチメディアを使っ
た日本語教育。⑦カナダ人が日本語を学ぶ動機や目
的について。

10. 大会全体に対するご意見やご感想

①よい大会だった。②勉強になった。

ビクトリア雑感

ランガラ・カレッジ 竹井明美

今年のCAJLE年次大会は、夏の終わりを告げ始め
ているガーデン・シティー、ビクトリアで開催され
ました。私は、昨年のトロントに続いて二度目、今
年も参加者として皆さんの研究や実践を分かち合
い、大きな収穫をえることができました。この大会
を通して、自らの日々の授業を振り返り、少しずつ
問題点を特定し、それを改善するために何ができる
のか自問自答を繰り返すことによって、自分が目指
す授業とは何かが明らかになってきたような気が
しました。そして、ビクトリアの二週間前に東京で
参加した「実践研究フォーラム」の際に細川英雄先
生がおっしゃった「実践＝研究」という教師のある
べき姿が再びよみがえってきました。

うれしかったのは、さがし続けてきた理想的な発
音指導のテキスト、「コミュニケーションのための
日本語発音レッスン」の著者、戸田貴子先生にお目
にかかれたことです。先生は共同研究者とともに、
どうしたら音韻習得が母語話者のレベル近くまで
到達できるのかというテーマで、その緻密な方法論
とデータ収集のプロセスを発表なさいました。私も
日ごろから学習者の音韻習得度が読み書きの力に
も影響するのではないかと思い、それぞれの学生が
母語と日本語との発音の違いに気づくように、日々
の授業のなかで試行錯誤を繰り返してきました。こ
の音韻習得のメカニズムを解明することはこれか
らの言語教育にとって大きな示唆になるにちがい

ありません。

戸田先生とは異なる観点から研究をしていらっしゃる原田哲男先生による教師研修会では、発音習得が母語話者レベルに達することの難しさを述べられ、発音指導は「日本語らしさ」「正しさ」よりも「理解されやすさ」を目指すべきだという説得力のあるものでした。ちょうど日本人が英語のLとRの聴き分けが生涯難しいように、母語と目標言語との音韻構造が異なる学習者にとって完全習得は不可能に近いのではないかと私自身もやや悲観的になることがありました。今後は、先生がご紹介くだ

さった発音指導の具体例を参考にして学習者の音に対する感覚、意識を高めるような教室活動を工夫していこうと思っています。

近年、日本語教育のグローバル化、学習者の多様化が顕著になってきています。CAJLEも、今大会では新たに継承語としての日本語を語り合うパネルが設けられ、会の内容はより包括的になってきているように思いました。これからも様々な背景を持つ日本語教育者が集い、学びあう場であってほしいと願っています。次回、トロントでの大会を楽しみにしています。

CAJLE 大会の魅力と今後への思い

甲南大学 原田登美

2004年のトロントに続いて2005年のビクトリアCAJLE年次大会に参加した。2回続けての参加である。今の予定では2006年にも参加したいと希望している。

そもそもの参加のきっかけは、私の勤務校の甲南大学とビクトリア大学が協定関係にあったことである。ビクトリア大学の野呂博子先生が日本へいらっしゃったのを機会に甲南大にもお招きし講演をお願いした。その折にCAJLEが紹介され参加への呼びかけがあったのである。カナダへは行ったことがないし知人もいなかったのが不安があったが、ビクトリア大学とカールトン大学という二つの協定校があり、この際に両校を訪れて意見交換をしておくことも必要だと考え、仕事と学会参加の二つの目的で2004年に初めてのカナダ訪問となった。

それが、トロント大会のプログラムの充実感と参加者との交流の楽しさ、そしてスタッフの暖かさのとりこになってしまったのだ。国内学会では連日4日間も続くようなプログラムにじっくりと参加したことがない。また、CAJLEでは研究発表だけでなく教師研修会があり、各講師から講義が聞けるのも有意義である。その上、世界各地と日本全国から集まった日本語教育に携わる人達と情報や経験などの交換が行なえるのも嬉しいことである。大勢の人

が世界のあちこちで日本語教育に関わっていて、その人達と4日間を共に過ごすというのは何と心強く魅力的なことであろうか。

今回2005年度のビクトリア大会では、広くて緑豊かなキャンパスにウサギやリスのほほえましい姿を見つけ、そのキャンパスの中に宿泊できる喜びから始まった。ちょうど30名の甲南大生が英語の夏期講座でビクトリアにいたこともあり、一足早くビクトリア大学に着いて甲南大生の授業を見学し大学の関係者と会合を持って広いキャンパスを歩き回った。

今年の年次大会では参加人数の割にはパネル数が多く、一パネルへの出席者が少ないのが気になった。あまりにも少人数でパネルが開かれるのは発表者の張り合いを失わせ、全体的にも大会の盛り上がり欠けてしまう懸念がある。過渡期でいろいろと試みておられるのだろうが、CAJLEが今後、質的に向上していくためには、むしろパネル数を絞って参加者を集中させ、その中で論議を高めて発表者と参加者の意識を高める必要があるのではないだろうか。大会準備委員会の並々ならぬ御苦勞に敬意を払うと同時に、CAJLE大会がその御苦勞に報いる成果を獲得することを切に願っている。

特別寄稿

カナダの日本語教育の発展のために国際交流基金がなすべきこと

齋木 宣隆（国際交流基金・トロント日本文化センター所長）

国際交流基金の調査によれば、カナダの日本語学習者の数は、現在、2万人。ここ10年ぐらいの間に3倍に増えたことになる。日本語学習者の数は、世界9位、英語圏では4位にランクされた。今や、カナダは世界で最も日本語教育が盛んな国のひとつとして注目されるようになったわけであるが、その一方で、日本語の教師が足りない、教材がない、ネットワークも弱い、といった深刻な問題が浮上しつつある。

こうした問題を解決するために、国際交流基金のカナダにおける出先であるトロント日本文化センターとして、可能な限りの支援、協力を行っていきたいと考えている。カナダは国土が広いので、各地の日本語教育機関のニーズを直接把握することは容易ではないが、日本語教育の現場で苦勞されている先生方のご要望やご意見を吸い上げることが、非常に重要なことだと私は思っている。

私自身、着任してまもなく1年半になろうとしているが、実際に日本語教育の現場に足を運び、授業を視察し、担当の先生方の話を聞くことが、当基金のサポートのあり方を考える上で、いかに重要なことであるかを実感させられることが多い。今年の9月末のことになるが、エドモントンで、アルバータ教育省の主催により、西部カナダ4州の日本語教育機関の代表者が一堂に会して情報、意見交換を行う会議が開かれた。日頃、顔を合わせる機会の少ない日本語教育関係者のネットワークづくりの推進につながる会議ということで当基金も参加者の旅費を助成する形で協力させていただいた。また、私も当基金の日本語教育支援のプログラムを説明するために、この会議に参加した。一日がかりの長丁場の会議で

あったが、各地からの参加者とface to faceで率直な話ができ、参加者の方々の問題意識にふれることができたことは大きな収穫であった。

カナダの日本語教育は、大学レベルだけでなく継承語教育レベルでも盛んであるが、近年は、初等中等教育レベルにまで広がりを見せていることが注目される。どのレベルでも課題が山積しているが、簡単に解決のつくことばかりではなく、道のりは平坦ではない。困難な課題があっても、それを乗り越えるような先駆的で斬新な試みに対しては、当基金として積極的に支援策を検討していきたい。一例をあげると、日本語を学習する意欲のある学生がいても教師がいないので、日本語講座を開けずに困っている地方都市の大学に対して、すでに充実した日本語教育を行っている大都市の大学の授業を、ビデオ会議方式で届けるという「遠隔地教育」をパイロットプロジェクトとして開始しようという動きが出てきている。

こうした革新的な試みは、実現のために、資金面での支えを必要としているが、当基金としては、遠隔地の日本語学習の新しい芽を伸ばしていくために、可能な限りの支援を行いたいと考えている。

他方、当基金が音頭をとって取り組まなければならない課題のひとつに、ネットワークづくりということがある。日本語学習者の大半が集中しており、日本語教育も盛んな西カナダでは、上述のような西部4州のネットワーク会議が企画、実施される雰囲気と環境が生まれつつあるが、オンタリオ州以東の東部カナダ6州においては、特に高校で日本語を教えている教師のネットワークが、まだできていない

という問題がある。日頃、現場で抱えている問題や悩みを相談できる仲間もなく、孤軍奮闘している東部カナダの教師たちに出会いと交流の場を提供するために、初めての試みであるが、現在、当基金のトロントの施設を会場として、懇談会を開催する計画を進めているところである。

初等中等教育、大学、継承言語教育、いずれのレベルにおいても、日本語学習者が増えていくのに比例して、教える先生方の苦労や悩みも大きくなっていく状況を打開するために、当基金としても、先生方に対するサポートを手厚く、きめ細かいものにしていかなければならないと痛感している。その意味からも、当基金のトロントの施設をセミナーやワークショップの場として活用していただくとともに、図書館のリソース（日本語教材、ビデオ、DVD）もトロント以外の地域へ貸し出しを行っているので、日本語教育に、役立てていただきたい。さらに、日本語教育関連のセミナーやワークショップに対して

は、一件あたり 500～1000 ドルの助成金を交付するローカル・グラントというスキームもあるので、良い企画があっても資金不足のため実現できなくて困っているという場合には、ぜひ相談していただきたい。

カナダに日本語が普及することは、日本文化への関心の裾野が広がることを意味すると同時に、日本理解の基盤が強化されることである。その意味からも、日本語教育への支援、協力は、当基金のカナダにおける活動の柱として位置づけられるべきである。

日本語教育は、息の長い仕事であり、一朝一夕に効果があらわれるものではないが、蒔かれた種が芽を出し、着実に根付いていけば、将来、計り知れない効果を生む可能性を秘めている。国際交流基金も、このような種蒔きのプロセスの一端を担っていききたい。

スペイン語学習体験記

日本語を教え始めて既に 14 年にもなり、時の流れの早さが嘘のように感じられるこのごろです。日本語を苦労しながら一生懸命に勉強している学生たちにはよくやってるな、とつくづく感心しています。私は、日本での大学時代にはフランス語を選択しましたし、20 年前に ESL の学生だった体験もありますから、外国語の難しさがわかっていますが、それでもつい学生には多くを要求してしまいます。今回このニュースレターの投稿を依頼されて、それを反省しながら、今年 1 月から始めたスペイン語学習の体験について書いてみたいと思います。

以前から外国語をもう一つ勉強したいという気持ちはありましたが、なかなか重い腰が上がらずに長い年月が経ってしまいました。サスカチュワンの長い冬を思うと、真冬にメキシコの暖かいビーチで

ラム 智子（レジャイナ大学）

のんびり？なんて夢のようです。スペイン語が話せた方が楽しいという思いで、決心が変わらないうちに早速受講の手続きをしました。趣味としてなら、今更単位も必要ではないのですが、プレッシャーなしでは、真剣に勉強しないのではと、昼間の仕事の合間を縫って一般学生とともに週に 4 度の授業に通いました。

スペイン語を習い始めてまず一番驚いたのは、授業進行の早さでした。母国語が欧米語の人にとって、日本語を習得するのは他の欧米語を習得する時間に比べて、約 3 倍かかると言われています。レジャイナ大学の日本語初級 I の 36 時間の学習の後に、学生はようやく平仮名、カタカナに親しみを覚えるものの、まだ簡単な日常会話などにはほど遠く、初級 II 終了後あたりから動詞、形容詞の現在、過去形

などを使って簡単な日常会話ができるようになるというのが現状です。これに比べ、スペイン語はその三分の二の24時間後には、日本語の授業がその3倍かけてとりあげる文法をカバーするのです。

学習のスピードに対応するために、まず単語を暗記してから授業にでないことには話になりません。私はよく自分の学生に、教室とは言葉の表現を作り出すための場所であり、単語という道具や材料なしでは創造活動ができないと言い聞かせています。学生にこんなことを言うのは容易なことですが、実際に自分がやらなくてはならないことになると、やはり苦勞します。日本の100円ショップでまとめ買いしてきた単語カードに単語を書いては、せっせと暗記するという日課が始まりました。単語さえなんとか覚えていれば、文法を理解するには問題がありません。しかし、問題は発話です。クラスでほかの学生は、英語が母国語であったり、フレンチイマージョンで育ったりして、間違いはあるにしても、スラスラと言葉がでてくるんです。叙述や意志表現のために、手っ取り早く単語を並べればいいのですが、スペイン語の品詞分類の語形変化や動詞の活用などを覚えなくてはならないので、そんな数々のステップを頭の中で考えているうちに、話すチャンスを失ってしまいます。同じ学部内のスペイン語を話す同僚にちょっと話してみようと思って、立ち止まって話そうとすると、習ったことを意識しすぎて一つの簡単な表現を言うのにも時間がかかり、とうとう話す意欲がなくなってしまいます。これは、頭の中で紙とペンを用いた「書き言葉」を声に出すということに過ぎません。一方では、単文や教科書に出てくる簡単表現などが、繰り返し使われたからでしょうか、非文法的でも何となく答えられて、それなりの対応ができるような気がします。おそらく日本語の学生も同じことを感じていることでしょう。

日本語のクラスでは、早く話せるようになりたいという希望を持つ学生には、覚えた表現を声に出すということを恐れずに練習させることが大切です。

そのために始めはあまり高度な文法を入れずに、コミュニケーションを深めることに重点を置き、次第に文法的な内容を加えていくというプロセスで学生の学習意欲を高めなくてはなりません。わたしたちの学科では、日本語クラスの学生には一人につき1学期間に合計8時間まで無料で日本人のアシスタントに個人チューターを頼めるという制度があります。ほとんどの学生は試験の準備や宿題のチェックなどに利用しているようです。私も、同じようなスペイン語のチューター制度を利用しましたが、あらかじめ勉強の目的を決めておかないと、ネイティブスピーカーに会っても、時間を無駄にしてしまう思いがします。その体験から、今年は日本語初級Ⅲの学生に宿題の一環として週に30分の会話を試みました。なるべく違う母国語圏の相手とペアを組んでチューターに会い、その二人が与えられたトピックを中心に会話を進め、エラーや会話の流れが詰まったときだけ、日本人のチューターが手伝ってあげます。同じレベルの学生同士が会話しますので、文法が分かりやすく、そして恐怖心や恥ずかしさもあまりないので話しやすいということです。このような形で学生に会話をする楽しさを少しでも経験してもらおうと思っています。

スペイン語学習の体験を振り返り、教師として、学習者として本当に貴重な体験をしたと思っています。時おり授業中、「何年に大学に行き始めましたか」とか、「誕生日はいつですか」なんていう質問に答えなくてはならないなど、正直な私は、若者の中にまじって恥をかくのに何の抵抗もありませんでした。しかしながら、同じ職場の教師の同僚や、第二言語習得の研究を専門とした見栄を捨てきれずに内容にこだわりすぎて、つい「会話をしたい」という目的を見失い、コミュニケーションの大切さを忘れかけていました。理屈として分かっている、実際に結びつけることの難しさを実感させられたことが今回の一番の収穫でした。

Nihongo Circle : Specializing in Japanese Imports
カナダの日本語教育をお手伝いします。



教科書の買付け、お任せください。

為替の換算から残本の始末まで。ご自分でやれば大変な手間です。面倒なことはプロに任せて「先生方は、授業と研究に時間を使うべきだ」と Nihongo Circle は考えます。Nihongo Circle では、1) US\$, CAN\$ 建てどちらも OK, 2) 残本の翌年回し OK, 3) デスクコピーについてもご相談ください。4) 「ご用ききサービス」もいたします。まずはご相談を。

★カナダに住むなら知っておきたい事柄満載
ジム・カミンズ、マルセル・ダネシ著 中島和子、高垣俊之訳

カナダの継承語教育 – 多文化・多言語主義をめざして –

読んでためになる、読まないでダメになる、やる気にさせる本
川口義一、横溝紳一郎 著

**John and Paul's Live Stage for Self-directed
Teachers of the Japanese Language – Vol.1 &2.**

内容はすべて日本語。日本語タイトルは??? (聞いてビックリ)

あの堅い「ひつじ」さんから出た
楽しく読める本

電子辞書の進化はすごい!

Canon の最強モデル、G-50 はまるで百科事典!

是非一度ご覧ください。

以上、お問い合わせは、Nihongo Circle Toronto Office

ysugi@sympatico.ca; 1-416-961-5510

又は、Nihongo Circle Waterloo Office

nihongoc@rogers.com

<http://www.nihongocircle.net> (一部準備中)

連載

短歌に詠まれた日本語教育の現場・その三（全4回）

鵜沢 梢（レスブリッジ大学）

今回は日本語教育における「書く」というテーマで短歌を集めてみました。いずれも私の作品ですが数年前に日本の短歌誌に発表されたものです。

・ アルファベット叩けば画面にひらがなの出てくることに驚くダニエル

レスブリッジ大学の現代語学科の語学コースではコンピュータ学習が週に1時間あります。日本語のコースでは、市販のソフトは使わず、教師が授業の進度や内容に合わせて作った学習ソフトを使っています。WinCallというオーサウェアを使って書いているのですが、これはカルガリー大学の楊先生が開発されたもので、先生のホームページから無料で手に入れることができます。このソフトは日本語化されていないコンピュータでも日本語が使えるので、10年前の北米のコンピュータ業界では画期的なものだったと思います。今でもとても便利です。興味のある方はお試しになって下さい。（ただしマックでは使えません。）私の大学のフランス語やスペイン語のコースでは教科書についてくる豪華なCDを使っているのですが、これが学生には人気なくて、コンピュータラボの時間は学生が2、3人しか来ないということです。しかし、わが日本語のコースではコンピュータラボはとても人気があり、休む学生はほとんどいませんし、ラボ以外に家で練習している学生もいるくらいです。

（WinCallはemailに添付して自分のコンピュータに送ることができます。）

それで、上記の短歌ですが、日本語は初めてとい

うカナダ人の学生がラボでコンピュータのアルファベットのキーを叩いたら画面に「あ」だとか「し」だとかの「ひらがな」が出てきて、びっくりしたときの様子を詠んでいます。日本語教師である私にとっては、コンピュータ画面の「ひらがな」に虜になってしまう学生は毎年とても新鮮に映ります。

北米の大学の日本語初級のクラスではローマ字を最初は使い、徐々にひらがな、カタカナを導入していくのが一般的だと思いますが、私の大学では、このコンピュータラボのおかげで1週間目からひらがなを導入してしまいます。2、3週間後にはカタカナを導入、という早さです。学生からの文句はほとんど出てきません。ひらがなを書くのは、彼らにとって本当の「外国語」を習っている、という感じなのかもしれません。英語圏の学生がフランス語やスペイン語を習うときにはアルファベットは改めて習いませんし。

・ カタカナの名札作りて手渡せばクラスの皆が嬉しがりたり

・ カタカナの自分の名前いち早くマディーが器用にコピーしており

それで、カタカナの導入ですが、ひらがなを最初に教えてあるので、書くほうはかなり簡単に覚えてしまいます。発音は同じだし、「へ」や「り」のようにひらがなの形とほとんど同じものや「か」と「カ」のように良く似た形のものかなりあります。それから「シ」と「ツ」のようにまぎらわしいカタカナは、ひらがなの「し」と「つ」の形を下

敷きにして教えると簡単に区別をつけて書けるようになります。

私は毎年クラスの学生の名前を紙にカタカナで書いて渡してあげるのですが、これがとても喜ばれます。自分の名前がアルファベット以外の文字で（中国人学生の場合はアルファベットや漢字以外の文字で）は書き表せるということがとても興味深いようです。ですから、一般のカタカナ語はまだスムーズに読んだり書いたりできなくても、自分の名前だけは初級の段階でしっかり書くことができるようになります。上記の短歌に読まれたマディーのような学生はたくさんいるのです。

それから長音につける「-」ですが、これはカタカナではないので、縦書きで文章を書くときには縦の棒に変わります。これは教室で説明しただけでは忘れてしまう学生が多いと思いますが、英文和訳練習等で文章を書く練習をするとき、ノートでは横書きでも黒板では縦書きに書く練習を繰り返すとクラス全体の学生が自然に縦横使い分けて書けるようになります。

・ ベンはいつも「便」とテストに名前書く「勉」という字を知りながら書く

漢字は初級の段階から少しずつ導入していきませんが、上級のクラスになると白人の学生の中には漢字オタクになってしまう者がけっこういます。上記の短歌に詠まれたベンの場合もかなりオタクっぽいところがあります。私は学生を短歌に詠むときは名前を変えるの普通ですが、ベンの場合は変えるわけにいかず、本名を使いました。ベンというのは大変ポピュラーな名前なので、ま、いいかな、と思います。

日本語の教科書では「勉強」の「勉」は初級の段階から学生がよく目にする漢字ですが、「交通の便」などに使われる「便」は上級になってからでないとあまり目にしません。ましてや「大便」「小便」のよう

な単語は、教科書にはほとんど出てこないと思います。「便」という漢字一字を使うときは「大便」の意味で、「交通の便がいい」という表現に使われる「便」の意味にはあまり使われません。それで私がペンに自分の名前を漢字で書きたいなら「勉強」の「勉」の方がいいんじゃないかな、「便」はちょっとよくない、と言ったら「そうですね、わかりました」とニヤッと笑って言って、しばらくはテスト等に「勉」と書いていたのですが、気が付いたらまた「便」と書いていました。ペンは日本に住んでいたことがあるので、「便」の意味はもちろん知っていたのです。知っていてわざと書いていたのですから、これは日本語教師や友達等を笑わせるためにわざと書いていたのでしょう。楽しい学生でした。

・ 小筆にてひらがな書けばわが裡に眠りいしものさわやかに目覚む

さて、今度は、日本語を教えている教師の心の風景を書いてみたいと思います。長年、北米で日本語を教えていると心がかさかさとしてきたな、と感じることがよくありました。学生に教える日本語は、日本語には違いないのですが、自分の日本語ではありません。私は自分を表現するための日本語、自分の心の糧となる日本語が必要だな、と無意識にずっと思っていたようです。それで、バンクーバーに住んでいたときに短歌を始めたときは、本当に気持ちが和みました。自分の言葉を紡ぎだして短い詩型の中にあてはめていく作業はとても楽しいのです。教える日本語だけでは、心が死んでいたような気がしました。

そんなときに、また心を和ませるものに出会いました。それは、書でした。今は漢字を勉強しているのですが、最初は、かな専門の先生についていました。ちらし書きの和歌を練習し始めたときに感じた心のときめきを今でも忘れることができません。学生に教えるひらがなと自分のために書くひらがな

はこんなにも違うものか、と思いました。

日本語を教えるのは楽しいし面白いと思います
が、自分のための日本語を開発するのも楽しいもの

です。心のバランスをとるためには、必要なことではないかと思います。

日本事情・・読書

王 伸子（専修大学）

読書の秋、という語は今の時代でも、秋口になると書店の店頭やさまざまなパンフレットなどに見かけられます。

「一般日本事情」では、その読書という課題を大学の後期、つまり9月からのクラスで取り入れています。日本語の本を読み、その内容等について発表形式で紹介するというのがその流れです。ただし、取り上げる本は小説やエッセーなどに限定しており、専門科目のテキストになっているものなどは対象外です。

日本にいるとは言え、学生たちは日々の授業や生活に忙しく、日本語のテレビやビデオ・DVDを見たり、新聞や雑誌を読むことはあっても、小説を読むという余裕はなかなかありません。読むことをしないので、文や内容を楽しむという経験もなかなかできません。日本語学習の面から見ても、良文に触れ吸収するという、上級学習者としての学びは大切なことですので、毎年、本を読むという作業を課題としています。

そういうわけで、この授業を通して日本語の読み物に挑戦し、また、他の学生が紹介する内容によっていろいろな本を知り、同時に、原稿を作って口頭発表をおこなうという日本語力の訓練もおこなうようにします。

さて、今年もその読書の課題の季節になり、10月第一週から発表が始まりました。

一人が何度でも発表してよいので、どんどん本を読む人は次々発表します。また、発表した回数だけ

点数になるというルールにしてあるので、最初のうちはやりたがらない学生たちも、発表しなければ損するだけだということがわかると、なんとか複数回発表しようと、いろいろな本を読み、原稿を作ってきます。また、一人の発表について5人まで質問ができることになっており、これもまた点数が加算されるので、日を追うごとに活発な質問がなされ、内容も高度になっていきます。この質疑応答の部分は、これからゼミに入り、発表・質問をしていかなければならない学生たちにとってはよい練習の場になるのです。

今学期、今までに出た発表について少し紹介しましょう。発表後に、学生が添付ファイルで送ってきた第一回目提出の原稿の一部です。これは、学生たちが作文したままの日本語なので、文法、語彙、変換間違いなどもそのままの状態です。

まずは養老猛司著『死の壁』を取り上げた学生のもので、文中、養老たけし、となっているのは養老猛司のこと、「バガの壁」とあるのは、『バカの壁』のことです。

「死の壁」を読んで

これから「死の壁」という本を紹介したいと思います。まず、作者のことを簡単に紹介します。作者は養老たけし、1937年神奈川県鎌倉市生まれ、1962年東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。1995年東京大学医学部教授を退官し、現在北里大学名誉教授。著書「人間科学」、「バガの壁」など、専門の解剖学、科学哲学から社会評論までの作品が多いで

す。この本は「バガの壁」に続く養老たけしの新潮新書の第二弾です。

—中略—最も印象的なのは、「俺は俺の矛盾」というテーマでした。著者は近代をこう定義しました。「人間は日々変化するもので、変わらないのが情報です。これを逆に考えるようになったのが近代です」。「私」は変わらない、変わっていくのは世の中の情報だという考え方の社会は、今皆毎日言っている情報化社会で、いわゆる私たちの脳中心の意識社会です。現代人の「俺は俺」「私は私」という考え方は意識中心の社会になったことに矛盾の一つです。こういう例を取り上げました。恋愛の末、結婚をして夫婦になりました。しかし十年経ってみて相手のことが嫌になりました。このときに「あの時、あの人を好きだと思った自分は本当の自分ではなかった。今あの人を見るだけで虫唾が走る。この気持ちを持っている自分が実際は本当の私なんだ」と考えるでしょう。しかし、死の問題では、「今日の私は昨日の私と同じだ、不変の自分が存在しているのに、どうしてそれが死ななくてはいけないのか」矛盾しています。—中略—私も著者が言った現代人の中の一人です。死についてはあまり意識していません。意識していないというより、死を遠ざけて考えたくないです。「あの時の自分は、本当の自分ではない」という考えが私も持っていました、本当の自分はどこにいるのかを疑問しました。実は本当の自分を見つけるのはすごく簡単です。今こそにいるのです、今の自分は本当の自分です。人生でただひとつ確実なことがあります。人生の最終回答は「死ぬこと」ということです。死を無視するのではなく、有限の時間の中で、どうやって人生をもっと楽しくするのか、生きがいをもっと深くにするのは一番大事なことです。これはこの本を読んだ後、私は分かるようになったことです。（養老たけし：「死の壁」、2004、新潮社）

次は、実は文学作品ではなく「マンガ」なのですが、この学生はもう一編、坂口安吾の『坂之上の雲』をとりあげて発表・レポート作成をしたので、マンガも許可しました。

『ベルサイユのばら』を読んで

このレポートでは池田理代子の『ベルサイユのばら』（1976）を取り上げ、内容について感じたこと

を述べたい。まずこの漫画を取り上げた理由は以下の三つである。(1)この漫画はフランス大革命を背景にして作られた作品であるため、登場人物はほとんど実在であり、そして、ストーリーも史実に忠実するため、歴史学の勉強に役に立つと思われる。(2)この漫画は難しい言葉は使っておらず、華やかな絵柄で読者に親しまれ、更に壮大のスケールをもち、普通の漫画にはほとんど見られなく、深い社会学の意味をもつ読み物である。(3)この漫画は1976年発売以来、絶大の人気を集め、TVアニメ化、映画化、そして宝塚のステージにもこの漫画に基づき、改編されたミュージカルが上演されてきた。

『ベルサイユのばら』を初めて読んだ時、この漫画が私に与えてくれた衝撃は大きかった、歴史というものがこれほど分かりやすく、漫画がこれほど厚重に社会的に語られたことはなかった。

—中略— 筆者はオスカル美しく、短い一生を通して、我らに何を伝えたかった？オスカルは女でありながらも男性より強く、気高く、自分なりの主張をもち、乱世で理想のために、戦っていた。オスカルは現代の社会においても、数多くの女性にとって、模範的な存在であるのではないだろう。そして、オスカル正義への献身精神が男性である私にとっても非常に勉強になれる。今、わが祖国中国には経済の発展に連れ、貧富の差や官僚の腐敗が深刻化しつつある。そのような社会情勢の中、オスカルのような正義感をもち、貧しい人々のために、命を捧げる覚悟をもて行政をする人はもっと多くなってほしい。（池田理代子：『ベルサイユのばら』、1976、集英社）

最後にもう一編、ジャンルも日本語の雰囲気もまったく異なるものをご紹介します。SF小説で、もともとはインターネットラジオで放送され人気を博し、その後、本になったもののようです。

『ファースケープ』について

皆さん、お早うございます。最近私は一冊の本に夢中しています。

SF好きな人知っているかもしれませんが、この本について。（SF——空想科学小説）

この小説の書名は「ファースケープ」、英語だったら「FARSCAPE」と言います。

残念ながらこの傑作の作者の名前今でも不明の状態です。(即ち、私も知りません)。

このSF小説の粗筋はジョン・クライトンというIASA(地球の航空宇宙局の事)の科学者は持論を証明する為にファースケープ1号(宇宙船のこと)の試験飛行中、突然現れたワームホール(空間と空間を結ぶ虫食い穴の事。電磁波を発生し、ファースケープ1号を5000光年離れた場所に運んでしまった)により5000光年、見たこともない星系に飛んでしまった。その後リバイアサン型宇宙船(生体宇宙船)モヤの中に会った異星人或いはエイリアンの仲間たちに助けられ、地球への帰還を目指すというストーリーです。

—中略—この中、単なるSFではなく、愛情、友情、親関係、上下関係、裏切りもの、権力紛争、猜疑、まるで小さな社会のようです。波瀾万丈な場面もあるし、平凡な場面もあります。すごく感動しました。

この小説は2001年ドラマ化され、世界多国、アメリカ、イギリス、オーストラリア、日本でも放送しました。かなり人気を集まりました。わたしはこの小説を読むきっかけは偶然にこのドラマを見ました。すぐ気に入りました。

今でもインターネットで放送しています。

<http://www.gyao.jp/drama/farscape1/>

見たい人はこのアドレスで見えます。

ドラマが見る甲斐があるけど、私は本が薦めです。何故ならば、本の場合は想像の余地が多いからです。以上です。

それぞれ、文章の量はワープロでA4用紙2枚分ほどです。かなり長めの作文といえるでしょう。一人目は中国語と朝鮮語の2言語を母語としており、日本語学習歴は中学校の外国語以来現在までなので、ほぼ8年。あと二人は中国語を母語とする学生で、日本語学習歴はそれぞれ2年ほどです。

これは日本語科目の授業ではないので、日本語そのものよりも、どのような本をどのように選んだか、

どのような意見を持っているのか、また、授業の中では質疑応答をどのように展開したかということが焦点になります。

しかし、論の展開もさることながら、まず、どのような本を学生たちが選んで持ってくるかということが興味深く、個性も出て楽しく感じます。ここ数年、学年の後半はこのプログラムをおこなっているので、その年その年の特徴も出てきます。ベストセラーが取り上げられることが多い年もあれば、映画の原作本が次々登場する年もあります。今年は今のところ、純文学や、外国文学の翻訳ものが数点出てきています。その理由は、以前、自分の母語で読んだことがあるので、日本語でも読んでみようと思ったということのようです。先週もウェブスターの『あしながおじさん』やモリエールの『守銭奴』が取り上げられました。

かと思うと、今マスコミでもはやされている占い師の本を持ってくる学生もいました。取り上げ方にもよると思ったので、まずは聞いてみました。すると、占いの仕方を詳しく説明し、どうぞ参考にしてくださいという形で終わってしまったので、一言物申そうと思ったところ、すかさず他の学生からの質問で、「この本を紹介して、いったい何が言いたいのですか」「この本を選んだ意味は」などと鋭い質問が出され、学生たちがこちらの期待以上に意図を汲み取って取り組んでいる感じが感じられました。

発表後に提出された原稿に手を入れて返し、その後、再提出してもらいます。その後、そうした各人の最終原稿を一つにまとめ、学年末には一人ひとりに配ります。

いかがでしょうか。こうした「読み、書き」を取り入れた日本事情のあり方も、また、一考ではないでしょうか。

BULLETIN BOARD

CAJLE としての新しい年度がまた始まりました。

夏の大会も、念願だったBC州で無事開催されました。大会委員長をつとめてくださったビクトリア大学の野呂先生はじめ、ビクトリア大学、およびBC州のみなさまには多大なるご協力をいただき、本当に感謝しております。その大会で、また新たな活力を得て、1年間、会員の皆様には日本語に関わる場で活躍していただきたいと願っています。

冒頭から私事で恐縮ですが、昨年度会長代理というかたちで理事会に関わってまいりましたが、今回、理事会より推薦をいただき、現在では日本に戻っておりますが会長としてもうしばらく CAJLE のために働くことになりました。来年には理事の改選もありますので、この1年、さらに CAJLE のありかたを考えながら活動してまいりたいと思います。

CAJLE はここ数年、さまざまな新しい活動を試みたり組織を見直したりしてまいりましたが、今、一つの転換点にきているのではないかと思います。一つは活動の範囲と大会への参加者です。ここ数年、夏の大会には日本や他のアジアの国からの参加者が多数来てくださり、その数も安定してきていますが、CAJLE は必ずしも国際的活動を目指しているわけではないと私自身は考えています。しかしながら、カナダに関心を持ち、カナダに毎年足を運んでくださる日本や香港、韓国の会員が一つの大きな刺激にもなっている事実は、喜ぶべきことでもあると思いますので、現在の CAJLE のあり方の一つの形として、これからも交流を持って行きたいと思います。

一方、広いカナダ国内には、まだ連絡も思うように取れていない日本語教育関係の方々が多くいらっしゃることも意識していかなければならない課題です。地域的に遠方であるため、または日本語の講座が通年ではないため、教員が常駐していないためなどの理由で、十分に連絡さえ取れない機関もあります。今後、こうしたバランスも考えながら、CAJLE の活動を考えて行きたいと思います。

どうぞ今後とも CAJLE への積極的なご参加、ご協力をお願いいたします。

会長：王 伸子

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2005年6月～2006年5月

年会費：連絡先がカナダの場合...CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合...US\$40.00、
上記以外の場合...US\$60.00（いずれも郵送の場合は小切手または money order で）

申込必要事項：氏名（日本語およびローマ字）、現住所、電話およびファックス（自宅、職場の両方）、
電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)

c/o NAJC, Toronto Chapter, 382 Harbord Street, Toronto, Ontario, M6G 1H9 CANADA

お問い合わせ: Tel: 416-516-8146 E-mail: suzu@eol.ca (鈴木)

Tel/Fax: 416-265-8452 E-mail: tonami@rogers.com (渡並)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.org>)

編集部便り

★ 今年の大会は、緑豊かなビクトリア大学でいろいろ学んだり会員のみなさまとおしゃべりしたりして大変楽しかったです。BC州は私の住んでいるアルバータ州の隣の州なのに、日本語関係の方ともなかなかお会いできる機会がありませんでした。でも今回は近所（といってもカルガリーからバンクーバーまで1000キロありますが）にも仲間が増えました。実はアルバータ州にも南アルバータ教師会という日本語教師のグループがあり、春と秋に日本語教師研修会を開いております。今年の10月からはカルガリー大学の楊先生とシャープ昭子先生が副会長、私が会長で会の運営を任されました。主な仕事は研修会企画です。というわけで、講師の先生をさがしております。みなさま、アルバータ州にいらっしゃる機会がありましたら、ぜひご一報ください。それでは、よいお年をお迎えてください。（サマレル）

★ トロントはもうすでに本格的な寒さを迎え、人一倍寒がり屋の私はこれからの寒さがどのくらいになるのかと心配で心配でたまりません。皆さまお元気でいらっしゃいますか。今年の夏は、ビクトリアで沢山の方々にお目にかかれて、本当に有意義な時間を過ごせました。NLの編集に携わっていったい何年になるのだろうかと思い、指折り数えようとしたのですが、どうしてもはっきりと思いつきません。初めは高橋編集長からファックスで送られてくる原稿の校正をし、1、2週間後トロント事務局に編集長を迎え、みんなでワイワイガヤガヤと編集作業をしたのを思い出します。そのころは、はさみや糊、テープなどでつぎはぎの原稿を作ったりと、結構手作業が多く、編集能力だけでなく手先の器用さも必要とされていました（?）。それが次号からはメールでの配信となるんです。便利で経済的ですが、ちょっと淋しいような複雑な気分になっています。では皆さま、お風邪など召しませんよう、幸多き新年をお迎えてくださいませ。（杉本）

★ CAJLEの年史によれば、ニュースレター創刊号が発行されたのは、1990年10月15日だったとのこと。それ以後、年2回の発行を欠かさず続けてきたわけですが、今号で印刷物として発行するニュースレターが最後になるのも、時代の流れということになるのでしょうか。私が発行に関わってきたのは19号からなのですが、やはり手にとって見られるニュースレターには愛着がありました。とても淋しい気がしますが、新しい形での通信も、今まで同様、会員を繋ぐ情報発信の場としての役割を担っていきますので、どうか、すみずみまで読んでください。これまで、印刷から発送までの細かい作業を担当して下さったトロント事務局のみなさま、本当にご苦労さまでした。今号の発送が終わったら、是非、打上げをしてください！（西島）

★ いつもながら31号の編集も慌しいなかで最終仕上がりを迎えました。学期末と重なり、時間を追って追加する原稿をもらったりして、ほぼ時間通りに印刷に回せたこと自体が不思議なぐらいです。印刷ですが、みなさんが触れたように、その印刷と郵送がこれで最後です。長年続いたニュースレターも新たなスタイルに切り替えることとなります。しかしながら、わたし自分の感覚から言えば、むしろ紙に印刷されたものよりは、電子ファイルの形でもらったもののほうが、かえって安心します。保存、検索、ひいてはささやかな引用などが便利だ、ということからでしょうか。はたしてこのニュースレターの読者の中からも同感が得られるのでしょうか。（楊）

カナダ日本語教育振興会（CAJLE）

ニュースレター・31号 発行日：2005年12月5日

編集：CAJLE Newsletter 編集部 Copyright: CAJLE (2005)